

五島列島の疱瘡墓について

The Study of Smallpox Tombs in the Goto islands

野上 建紀
賈 文夢
石橋 春奈

Nogami Takenori
Jia Wenmeng
Ishibashi Haruna

五島列島の疱瘡墓について

長崎大学 野上 建紀

長崎大学 賈 文夢

長崎大学 石橋 春奈

The Study of Smallpox Tombs in the Goto islands

Nogami Takenori (Nagasaki University)

Jia Wenmeng (Nagasaki University)

Ishibashi Haruna (Nagasaki University)

Abstract

This paper is the research report on smallpox tombs located in the Goto archipelago, Nagasaki prefecture. The Goto archipelago are islands where many hidden Christians had lived. And several churches in the Goto archipelago were registered as World Cultural Heritage in 2018. The Okuura district of Fukue island and Enoura district of Maeshima island, where the smallpox tombs were investigated this time, are closely related to hidden Christians.

A memorial monument for those who died of smallpox remains in the Nangoura area of the Okuura district of Fukue Island. Four smallpox tombs were confirmed around it. They are some 19th century tombstones. The Okuura area is the land where the hidden Christians who migrated from the Nishisonogi Peninsula landed, and there are also some hidden Christian tombs nearby. On the other hand, on Maeshima, off the coast of Naurushima, there is the tomb of Yamaguchi Rinjuro, who died of smallpox infection. There are more than 10 tombs that combine stones around it. Maeshima is said to be the island where the hidden Christians settled, and it is difficult to determine whether these tombs are smallpox tombs or hidden Christian tombs. The isolated space of smallpox and the living space of hidden Christians are close to each other, and there are some parts that share the space.

Keywords: Smallpox tomb, Goto islands, Hidden Christian

はじめに

近世の潜伏キリシタンと疱瘡患者はいずれも差別や迫害など排除の対象であった。そし

て、五島ではこれら二つの差別と迫害が交差し、重なり合うことがあった。本来、疱瘡患者と潜伏キリシタンは、全く別の存在である。一方は感染予防のために社会から隔離され、他方は禁教ゆえに自ら潜伏した人々である。理由は異なるが、いずれも社会の視線が届かない場所が居場所となったことは共通である。そして、五島でその両者が時間と空間を共有することとなった背景には、大村藩領の外海地方から五島藩への農民移住がある。18世紀後半、五島藩は台風、大火、虫害、疫病など相次ぐ災害により、労働力不足に見舞われ、藩の財政は疲弊していた。一方の大村藩は人口増加により耕作地が細分化し、またキリシタン宗門改が厳しさを増していた。二つの藩の利害が一致したことで寛政9年（1797）に「人送り協定」が結ばれ、大村藩から五島藩へ公的な農民移住が始まったのである。この農民の中に潜伏キリシタンが多く含まれていたことは言うまでもない。

潜伏キリシタンは迫害から逃れるように海を渡ったが、渡った先で手に入る土地は先住者が住まない無人の土地であることも多く、その中の一つが疱瘡患者の隔離地として忌避されていた土地であった。例えば、2018年7月に世界文化遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の一つである上五島の頭ヶ島の集落は、こうして五島に渡ってきた開拓移住者たちが疱瘡患者の隔離地として忌避されていた土地に移住して成立した集落とされている。

本報告で扱う疱瘡墓は、五島列島の福江島奥浦地区の南河原と前島江ノ浦の疱瘡墓であるが、いずれも潜伏キリシタンと深いつながりがある土地である。福江島奥浦地区は潜伏キリシタンの集落が点在する一方、海岸部の南河原の浜は疱瘡患者が捨てられた土地であり、現地には疱瘡感染によって亡くなった人々の霊を慰めるために「三界万霊塔」という石塔が建てられている。一方、奈留島沖に浮かぶ前島もまたかつては「カクレキリシタン」の集落であったとされており（長崎県教委 1999）、かつ疱瘡墓が残る島である（五島市 2011）。空間的だけでなく社会的にも隔離された人々が、それぞれ異なる理由でいわゆる「離島の離島」に居場所を見つけ与えられたものであった。

本論では福江島や前島に残る疱瘡墓を通して、近世の潜伏キリシタンと疱瘡患者の空間的共有について考えてみたい。

1 調査の経緯

2020年より長崎県東彼杵郡波佐見町の文化的景観の基礎調査のため、波佐見町内の中尾

郷や鬼木郷の墓地の悉皆調査を行なっている。その中には天然痘（疱瘡）に罹患して亡くなった人々の疱瘡墓も含まれていた（野上・賈 2021）。そこで波佐見町の疱瘡墓の特質を知るために、波佐見と同じ旧大村藩領や周辺地域の疱瘡墓等の調査を始めることとした。まず旧大村藩領の時津町元村郷の疱瘡墓群（2021年2月19日、4月24日調査）と西海市の疱瘡関連の霊魂塚等の調査（2021年5月2日調査）を行なった。続いて長崎市の旧天領の疱瘡関連の無縁塔等（2021年5月21日調査）、旧大村藩領の大村市田下町の霊魂塚（2021年7月2日調査）、旧平戸藩領の小値賀町野崎島の疱瘡祈禱関連文書の調査（2021年6月18～20日調査）を行なった。

そして、2021年の7月から8月にかけて、五島列島の二つの島、福江島の南河原、前島の江ノ浦の疱瘡墓の調査を行った。本論はその調査に基づく研究報告である。

2 調査地の地理的・歴史的環境

五島列島は九州西方に位置する島嶼群であり、大小合わせて150以上の島々から構成されている。主な島を挙げると、宇久島、野崎島、小値賀島、中通島、若松島、奈留島、久賀島、福江島などが北東側から南西側に向かって並んでいる。現在の行政区域は、宇久島が佐世保市、野崎島と小値賀島が小値賀町、中通島と若松島が新上五島町、奈留島以下が五島市となっている。

今回、調査を行った島は、福江島と前島である（図1）。いずれも旧福江藩領（五島藩領）に属していた。福江島は五島列島の中の南西部に位置する列島最大の島であり、近世の五島藩の城と城下をもつ島である。その城下の北方、島の北東部に旧奥浦村は位置している（図2）。奥浦村は明治18年（1885）に福江村から奥浦郷、戸岐郷、平蔵郷が分離して成立した村であり（図3）、昭和29年（1954）に福江市に合併されるまで存続した村である。現在の五島市奥浦町、戸岐町、平蔵町にあたる。地区内の六方（むかた）の海岸は寛政9年（1797）の大村藩からの最初の公的な開拓移住者の一部が上陸した場所であり、奥浦地区には潜伏キリシタンの集落が形成され、潜伏キリシタンの墓地も残されている。

『五島奥浦郷土誌』にも「南河原、浦頭、観音平、半泊、鰻網代、間伏、堂崎、大泊 東彼杵郡大村ヨリ移住セシモノナリト」と記されている（五島奥浦郷土誌編集委員会 2016）。そして、明治になり、カトリック禁教が解かれると、地区内に堂崎教会（堂崎天主堂）が建設され、下五島地区のカトリック教会の信仰の中心となった。

一方の前島は、奈留島の南端付近に浮かぶ小島である（図17・20）。江戸時代の奈留島および周辺島は、奈留・船廻・大串・夏井・泊の五郷から成っていたが、後に夏井は大串に合わされ、奈留が浦と改名したことにより、浦・船廻・大串・泊の四郷となった。そして、明治22年（1889）に四郷を合わせて南松浦郡奈留島村となり、昭和32年（1957）に町制施行とともに奈留町となった。さらに平成16年（2004）には福江島の福江市、南松浦郡富江町・玉之浦町・三井楽町・岐宿町と合併して五島市の一部となった。

江戸時代、前島は泊郷に属しており、現在は長崎県五島市奈留町泊に所在する。面積0.47 km²の小さな島であり、平地は極めて乏しい。干潮時には南西側の陸繋島である末津島と砂州（トンボロ）で結ばれる（図18）。人家は島の北東海岸の笠松集落、西海岸の江ノ浦集落の他、海岸線に点在している。2017年現在、23人の住民が生活を営んでいるという。昭和30～40年代には37戸151人であったため、大きく人口が減少している。また、前に述べたように島の集落はかつて「カクレキリシタン集落」であったとされている。

3 福江島南河原の疱瘡墓

『五島編年史』によれば、文化13年（1816）6月に「藩主が戸楽の智仙房を呼び、南河原に一寺を建立し、慈雲山軽成院と号せしめ、寺領五石と久賀島恵剣寺の寺領五俵二斗七合、兼帯料二俵を下さる。恵剣寺領は先に火災のため廃寺となったもので、文政四年寺社帳に、恵剣寺の物成を南河原の軽成院に下さる」と記されている（中島功 1973）。そして、寺の「由緒沿革綴」によれば、軽成院の建立は疱瘡禁圧を目的の一つとしており、「文化年間、福江村に疱瘡流行し、御殿では姫君もこれに罹ったので種々医薬を用いて手当をしたが、効果が見えなかった。藩主は奥浦村南河原に一寺を創立し、不動明王を安置して慈雲山一心軽成院と称させ、疱瘡禁圧の祈願をさせた。やがて平癒の効験現れ、みな恩恵に浴し、以来疱瘡の病根が絶たれた」という（福江市史編集委員会（編）1995）。また、別の記録には「南河原に軽成院跡が寺屋敷として残っており、その海岸には疱瘡で死んだ人の無縁墓が累々としてあった」とあるという（福江市史編集委員会（編）1995）。そして、現地の石塔鼻というところには「三界萬霊塔」が建てられている（図4）。さらに石塔鼻付近の崖上部は墓地となっており、潜伏キリシタン墓とされている石組墓の列（図14）や禁教解禁後にカトリックに復教した信者の墓（田端墓）がある（図15）。田端墓は2本の石柱を組み合わせた十字架の墓であり、一つの墓の正面には和暦の「明治廿六年三月」と

西暦の「千八百九十三年三月」が並んで刻まれている。

このように南河原は疱瘡にかかわる土地であるとともに、潜伏キリシタンとも関わりがあることが知られており、現地調査を行うことにした。日程は2021年8月19～20日である。調査者は野上建紀（長崎大学多文化社会学部・多文化社会学研究科）、賈文夢（長崎大学大学院多文化社会学研究科博士前期課程1年）である。

（1）「三界萬靈塔」

南河原の海岸は浸食されてできた崖が海岸近くに迫り、崖下には礫が敷き詰められた浜が広がっている（図5）。そして、海に突き出した岩場に3段の台座が据えられ柱状の塔が建っている。石塔鼻とよばれる場所である。海に面した石塔の正面には「三界萬靈塔」と大きく彫られている（図6）。側面には文字はなく、陸側の背面には建立年月が刻まれているようであるが、磨耗が著しく正確に判読することが難しい。「寛政十三年」（1801）あるいは「文政十三年」（1830）のように見える。

石塔の側には説明石板があり、それには台風12号（1956年か）によって倒れたものを昭和53年に立て直したことが書かれてある。しかし、その後もまた波に洗われて倒れたようで、近年、再び立て直されている。

（2）墓石（供養墓）

記録によると「海岸には疱瘡で死んだ人の無縁墓が累々としてあった」とあるが、現在では海岸にそのような光景を見ることはできない。しかしながら、崖の斜面の林の中を探索したところ、4基の柱形の墓を確認することができた（図7）。いずれも海側に正面を向けている。墓石の面によって、磨耗度が大きく異なっている。いずれも墓石の上面と正面の磨耗が著しい。おそらく波によって倒された状態で浸食を受けたものと推定される。それを後世に設置し直したのであろう。つまり、建立当時の原位置を保っていない可能性が高い。

また、付近に石組墓のような石の集積（図12）を見ることができるとは、墓であるかどうかよくわからない。あるいは改葬した際の痕跡かもしれない。確認された4基の墓の墓碑銘は以下のとおりである。

①1号墓（図8）

(正面)「南無阿彌陀佛 白譽雲哲信士」、(側面)「爲並當處痲瘡死亡」

② 2号墓 (図9)

(正面)「天保三年壬寅三月二日 栄林信士 施主 肥前屋嘉一良」

③ 3号墓 (図10)

(正面)「文政 譽…」

④ 4号墓 (図11)

(正面)「敬譽光生信女 闡譽自性信士 祥雲妙悦信女」、(側面)「祥 二月廿八日 文政七申二月廿三日 敬 同日」、(側面)「孝子 白金屋幸助 同 富」

1号墓をみると、「當處痲瘡死亡」とあるので、この一帯が痲瘡で亡くなった人々が埋葬された場所であることを表している。

被供養者の没年は、2号墓が天保3年(1832)、3号墓が文政年間(1818~1831)、4号墓が文政7年(1824)である。1810~1830年代の中に収まる。これらの没年は建立年代の上限でもある。ただし、2号墓に刻まれた天保3年の干支は壬寅ではなく、壬辰である。天保年間の壬寅は天保13年(1842)である。年号が正しいのか、干支が正しいのか不明であるが、没年と建立年の間に年や干支があやふやになるだけの時期差があった可能性を示している。

4号墓は、子らが父母らを供養するために建てた墓であるが、没年月日を見ると、同日を含めて数日間で3人が亡くなっているようである。

施主には「肥前屋」や「白金屋」など屋号が記されており、被供養者は福江城下の商家の縁者とみられる。

4 前島江ノ浦の痲瘡墓

五島市の広報ウェブサイトによると、前島の江ノ浦には、奈留代官山口家の次男である山口倫十郎のものとされる墓が残っており、墓石の側面に「痲瘡」で亡くなったことが刻まれている。そして、倫十郎の墓石の周囲に痲瘡墓と思われる墓が点在するという。また、「尼妙道信女位」と刻まれた墓石があり、倫十郎を尼となって弔った妻のものと伝えられている(五島市 2011)。

そこで今回は倫十郎の墓とその周囲の痲瘡墓と伝えられている墓を調査対象とした。現

地踏査は2021年7月24～26日の日程で行った。調査は前記の野上建紀・賈文夢の他、石橋春奈（長崎大学大学院多文化社会学研究科博士前期課程1年）が参加した。7月24日に長崎から奈留島に移動し、25日に奈留島と前島を往復し、26日に福江島を経由して長崎に戻った。

（1）墓地の位置

奈留島より小型定期船（喜代丸）で前島の笠松港を経て、江ノ浦港に至る。15分ほどの行程である。江ノ浦港の湾に面して小さな集落があり、湾が最も奥まったところの小さな平坦地に江ノ浦の疱瘡墓がある（図19）。背後は山林となっており（図21）、平坦地以外には墓とみられるものは確認できなかった。

（2）墓地の概要

墓地は海のある北西側を正面にしている（図22）。計12～14基の墓がみられる。基数に幅があるのは一つの墓の石組が二つに崩れて分かれている可能性があるためである。便宜的に墓A～Nと符号を付した。現地でスケッチした図（図23）を示しておくが、測量を行ったものではなく、縮尺は任意である。墓の配置の説明のための模式図と理解していただきたい。

数基並んだ墓の列が3列ある。最前列に5基、2列目に5基、最後列に3基、そして、最前列と2列目の間に1基配されている。また、墓は柱形と石組墓に分けられ、その数は柱形の墓が2基、石組墓が10～12基である。柱形の墓は墓Iと墓Hの2基であり、墓Iが奈留代官次男の山口倫十郎の墓とされるもので、墓Hがその妻の墓と伝えられているが、その真偽については後述する。その他の墓は石組墓とみられるものである。以下、それぞれの墓について簡単に説明を行う。

（3）墓の形態

①柱形墓

墓H（図31）は前に述べたように、奈留代官の山口家の分家の山口倫十郎の妻の墓とされているが、それを示す証拠があるわけではない。墓石の正面に「尼妙道信女位」、側面に「天保十三寅壬年八月十日」（1842）の没年月日（図31左）、「み洋」とみられる俗名（図31右）が刻まれているが、それ以上のことはわからない。一部の文献では倫十郎の菩提を

尼となって弔い、倫十郎の側に葬られることを願ったと推定しているが（奈留町郷土誌編纂委員会 1992、2004）、極めて情緒的で現代的な視点であるといわざるをえない。夫婦であるかどうかもわからず、史実とは別の話である。

墓 I（図32）は正面からみて左側面に「瘡瘡而□□死」（瘡瘡而此病死カ）と刻まれており（図32右）、死因が瘡瘡であったことがわかる。奈留代官の山口家の分家の山口倫十郎の墓とされている。山口倫十郎は「船見山掛」を務め、文化10年（1813）3月に隠居したとされている（奈留町郷土誌編纂委員会 1992、2004）。正面を見て右側の面に「施主山口雄太郎」（図32中央）と刻まれていることから、被葬者が山口家ゆかりの人物であることは確かである。しかし、摩耗と風化が著しく、海側に面した正面の文字はほとんど読み取ることができないため、戒名や没年月日も不明である。その他、倫十郎と特定することができる史料の存在も知らない。

②石組墓

石組墓は平面プランの原形が崩れたものが多いが、墓 A（図24）は長方形の平面プランを有しており、その他にも方形の一部の形をとどめたものが見られる。

墓 B（図25）は一つの大きな石が墓標のように置かれ、その前に石を組んだ形をしている。

墓 C（図26）は周囲の墓の石のこぼれである可能性があり、独立した墓とみてよいか疑問が残るが、墓の配列から墓とした。

墓 D・E（図27・28）と墓 F・G（図29・30）はそれぞれ二つの墓に分けたが、その境界は明瞭ではない。特に墓 F と G は木の根元に石が寄せられており、石組墓に配置された石は原位置を保っていないとみられる。

墓 J・K・L（図33～35）は石組の形状が円形あるいは不定形を呈している。外側に大きめの石を並べ、内側に比較的小さな石を詰めている。

墓 M（図36）は三つの大きめの石を組み合わせ、中央にやや小さな石を置いている。墓 N（図37）は小さめの石が不定形にばらけた形状をしている。

（4）墓の年代と前後関係

江ノ浦墓地の墓の中で年代が刻まれたものは、墓 H のみである。天保13年（1842）と刻まれている。墓 I は施主が山口雄太郎であり、倫十郎没後、雄太郎が存命時に建立された

ものと推定される。いずれも18世紀末の五島への開拓移住の後のことと見られるが、18世紀末の移住当初より前島へも移住が行われたか、時間を置いて他の島を經由して移住したものかは不明である。

江ノ浦墓地の墓の多くは石組墓であり、これらも疱瘡墓とされている。しかし、比較的遺存状態のよい墓Aをみると、平面プランが長方形を呈しており（図24）、前島がかつて「カクレキリシタン集落」であり、島民がその末裔であることを考え合わせると、潜伏キリシタン墓である可能性を考えることができる。

次に山口倫十郎の墓と石組墓と潜伏キリシタンの移住の前後関係について考えられる主なパターンをあげてみる。

①本来、疱瘡患者を隔離するための島であり、形態は不明であるが、疱瘡墓がつくられていた。それゆえ疱瘡を患った山口倫十郎も埋葬された。その後、潜伏キリシタンが移住し、周囲に石組墓が築かれた。

②本来、疱瘡患者を隔離するための島であるが、当該地に墓地はなく、山口倫十郎の墓が最初に築かれ、続いて潜伏キリシタンが移住し、周囲に石組墓が築かれた。

③18世紀末の開拓移住の際に潜伏キリシタンが移住し、石組墓が築かれた。その後に疱瘡を患った山口倫十郎が加えて埋葬された。

その他にもいくつかパターンが考えられるが、大きくはこの①～③のパターンであろう。パターン毎に山口倫十郎の墓と石組墓と潜伏キリシタンの移住の前後関係を考えてみる。

①と②は潜伏キリシタンの移住が山口倫十郎の没後、③は没前となる。石組墓については、①と②の場合、基本的に山口倫十郎の墓よりも新しいが、①の場合は山口倫十郎の墓よりも古い疱瘡墓が含まれる可能性が考えられる。③の場合、石組墓が築かれた期間の中に山口倫十郎の墓の建立年代が含まれる。

これらのこと、すなわち山口倫十郎らの墓と石組墓の新旧関係などを墓の配列から明確に読み解くことはできず、現時点で明らかにすることは難しい。墓の配列をみると山口倫十郎の墓を中心に墓域が広がったようにも見えるし、山口倫十郎の墓も配列の流れの一つのようにも見えるからである。ただし、潜伏キリシタンの墓の配列の流れの上に山口倫十郎の墓を築く状況自体は考えにくく、①と②の方が可能性が高いように考える。

前島が古くから疱瘡患者を隔離するための島であったかどうかは不明であるとしても、

疱瘡によって亡くなった山口倫十郎が埋葬されたり、潜伏キリシタンが移住したことを考えると、それまでは未開拓の無人島であったか、忌避された土地であったことは確かであろう。そして、今回の調査の結果、一部の石組墓については潜伏キリシタンの墓である可能性が考えられ、山口倫十郎の没後に多くの石組墓が築かれた可能性を示唆している。潜伏キリシタンの前島への移住時期についてはまだよくわからないが、頭ヶ島（かしらがしま）において見られる疱瘡患者の隔離地に潜伏キリシタンが移住するパターンに近いのではないかと考える。

5 考察

18世紀末、大村藩に属する外海地区（西彼杵半島西岸）では人口が増加し、五島藩と大村藩との協定の下に開拓移住が行われた。開拓移住者の中には多くの潜伏キリシタンが含まれており、新たに五島列島各地に潜伏キリシタンの集落が形成された。前述したように福江島の奥浦地区の六方の海岸は最初の開拓移住者が上陸した場所として知られ、付近には潜伏キリシタンの集落が点在しており、また潜伏キリシタンの墓も残る（図16）。一方、奈留島および周辺にも多くの「カクレキリシタン」集落が生まれ、前島の集落もその一つであったとされる。

そして、いずれの土地も疱瘡患者の隔離地であり、疱瘡による死者が埋葬された土地であることは確かである。いずれの墓地にも「疱瘡」が死因であることが刻まれた墓が存在する。南河原については古文書においても疱瘡による死者の埋葬地であることが記されている。

また、没年代がわかっている疱瘡墓はいずれも19世紀前半のものであり、また大村藩より潜伏キリシタンを含めた開拓移住者が五島に公的に渡ってくるようになったのも18世紀末以降の19世紀である。つまり、疱瘡患者と潜伏キリシタンの両者は時間的にも空間的にも重なっている。

それから、いずれの土地にもいわゆる石組墓が存在するが、その性格の判断は分かれている。南河原の三界萬霊塔のある石塔鼻の崖上には石組墓が並んでおり（図14）、それらは潜伏キリシタンの墓とされている。石塔と石組墓は水平距離でわずか40mほどの距離（図4）であるが、現在は一般墓地の中にあり、明治以後のカトリック教徒の墓が隣接していることが判断理由として考えられる。一方、江ノ浦の石組墓は疱瘡墓と推定されている。

その推定の根拠は同じ墓地の中に「疱瘡」と刻まれた墓石が存在することである。つまり、性格の判断は、墓そのものの形状や構造によってではなく、その土地が持つ歴史や伝承、周囲の状況によって判断されていることが多い。

しかしながら、前に述べたように、実際には潜伏キリシタンと疱瘡感染者は時間と空間を共有しており、土地の歴史や伝承もまた共有しうるものである。そのため、潜伏キリシタンの墓とされている石組墓の中には疱瘡墓が含まれている可能性を考えなくてはならない。あるいは江ノ浦墓地のように疱瘡墓とされるものの中にも潜伏キリシタン墓が含まれている可能性がある。

五島列島の潜伏キリシタン墓の一つが石組墓であることは確かであるが、潜伏キリシタン特有の形式というわけではない。野村俊之は北九州（西九州）においては石組墓が一般的な墓制形態、伝統的な墓制として認知されてきたとみている（野村・加藤 2015）。

一方、疱瘡墓の形態の種類については、潜伏キリシタン墓以上によくわかっていない。墓碑銘のある墓石を持つものは一般的な仏式の墓と同様の形式のものであるが、古河古松軒が大村領での疱瘡対策について述べているような「疱瘡をやめば介抱人を添へて二三里の外なる山に送る事なり。（中略）死すれば其山へ葬り捨る」状況にあっては、おそらく簡易的な一次墓が設けられたものと見られる。南河原では一般的な仏式の供養墓が後年、建立されているが、それは疱瘡流行の非常時にあっては簡易的な埋葬が行われていたことを示すものであろう。簡易的な埋葬の一つが石組墓であった可能性は十分考えられるし、実際に天草地方では疱瘡小屋の近くの墓地で多くの石組墓が発見されている（松本 1981）。

本来、キリシタンの埋葬形態が伸展位であったことと、地上表徴の機能の一つが被覆・埋葬範囲の明示あるいは遺体防護であること（野村・加藤 2015）を考えると、石組の平面形が長方形であることが一つの判断材料となる可能性があるが、潜伏キリシタン墓の全てが長方形を呈しているわけではない。例えば、付近の潜伏キリシタン墓地と推定されている旧木ノ口墓所の石組墓の平面形は方形から略方形を基本としている。このことについては、移住元である大村藩領において潜伏キリシタンが「長墓改」を回避するために地上構造物を方形にすると考えられる例があり、これに倣ったものであると伝えられている（加藤ほか 2014）。野村の言葉を借りれば、五島において「先祖伝来の墓制採用」を行っている（野村・加藤 2015）。逆に疱瘡墓とみられている墓の中にも長方形の形状をした石組墓がある。

このように現状では潜伏キリシタンの墓と疱瘡墓の明確な構造的相違が不明であること

から、墓の形状や構造から潜伏キリシタン墓と疱瘡墓を区別することは難しい。今後は18世紀以前（すなわち潜伏キリシタンを含む開拓移住者が入植する以前）から石組墓が五島列島に存在したかどうかを含めて、潜伏キリシタンや疱瘡病者といった「特殊」な事情の墓だけではなく、近世の五島地方の一般的な墓の形態を明らかにすることが必要である。その上で五島列島の墓制史上に潜伏キリシタン墓や疱瘡墓を位置づけていく作業が必要である。

おわりに

疱瘡患者の隔離地として選ばれた土地の環境はさまざまである。今回、紹介した福江島の南河原のような海岸や前島のような離島の他、中尾郷葉山（長崎県波佐見町）のような人里離れた山中も隔離地となった。環境はさまざまではあるが、周囲と地理的に隔絶された空間であることは共通である。地理的に隔絶された空間であるからこそ、疱瘡患者の隔離地として選ばれ、「忌避される土地」となった。その結果、無人化したことで迫害された潜伏キリシタンが移住することを許された。

そして、謂れなき差別を受けた人々に許された魂の安息の地ともなった。元村郷（長崎県時津町）の疱瘡墓の場合、人里離れた山中にあった。疱瘡で亡くなった人々の墓であることが知られた「忌避される土地」であった。種痘が普及して疱瘡墓を作らなくなると、その場所には死んだ牛や馬を埋めたという。さらには治療の甲斐なく亡くなった原爆被爆者たちを埋葬している。近世において差別や迫害あるいは隔離の対象となっていた潜伏キリシタン、疱瘡患者と同様に、現代の原爆被爆者もまた謂れのない差別を受けていたことはここで述べるまでもない。

疱瘡墓はそれ自体、隔離と差別を物語るものであるが、疱瘡墓が存在する空間は疱瘡患者だけではなく、その他の差別と迫害の空間ともつながっている。疱瘡墓の土地の前後の歴史を含めて考察していくことが必要である。それと同時に疱瘡墓の形状と構造を考古学的に明らかにすることで、差別や迫害の重層を墓の種別と空間配置によって明らかにすることができると思う。

本研究は、長崎大学多文化社会学部の「令和3年度部局長裁量経費による研究シーズ育成事業」の一つである。

引用文献・参考文献

- 加藤久雄・野村俊之・白濱聖子・藤本新之介 2014「五島列島の潜伏キリシタン墓の研究（旧木ノ口墓所調査）」『地域総研紀要』12巻1号 pp. 53-70
- 五島奥浦郷土誌編集委員会（編）2016『五島奥浦郷土誌』おくら夢のまちづくり協議会
- 長崎県教育委員会 1999『長崎県のカクレキリシタン』長崎県文化財調査報告書第153集
- 中島功 1973『五島編年史』国書刊行会
- 奈留島尋常高等小学校 1918『南松浦郡奈留島村郷土誌』（奈留町教育委員会1988復刊）
- 奈留町郷土誌編纂委員会 1992『郷土奈留』奈留町教育委員会
- 奈留町郷土誌編纂委員会 2004『奈留町郷土誌』奈留町役場・奈留町教育委員会
- 野上建紀・賈文夢 2021「波佐見中尾山の「疱瘡墓」について」『金沢大学考古学紀要』第42号 pp. 113-134
- 野村俊之・加藤久雄 2015「石組墓の成立と変化についての予察（福江島旧木の口墓所の潜伏キリシタン墓をめぐって）」『地域総研紀要』13巻1号 pp. 35-46
- 福江市史編集委員会（編）1995『福江市史』福江市
- 松本教夫 1981「高浜の疱瘡について」『西海辺記』第2集 天草民俗研究会 pp. 27-38
- 五島市 2011（更新）「疱瘡墓」（<https://www.city.goto.nagasaki.jp/s014/010/040/160/200/020/20190322154444.html> 2021年7月28日確認）

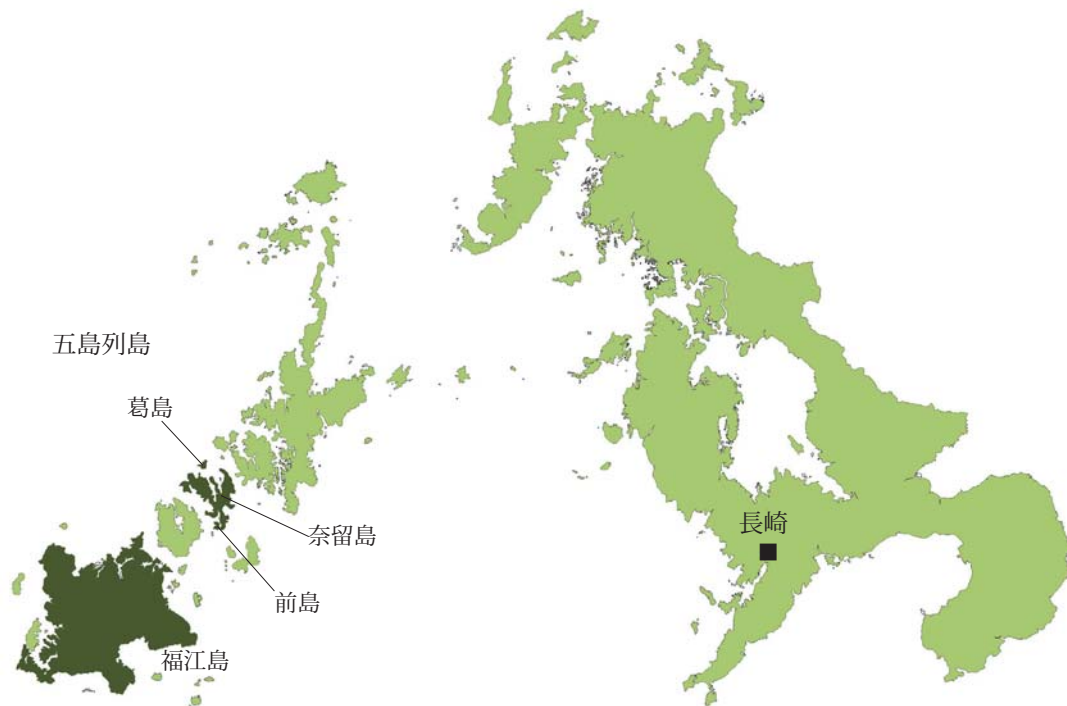


図1 福江島・奈留島・前島・葛島位置図



図2 福江島衛星写真



図3 奥浦地区衛星写真



図4 南河原海岸衛星写真



図5 南河原の海岸と「三界萬霊塔」



図6 「三界萬霊塔」の正面（左）と背面（右）



図7 南河原の痲瘡墓群（左写真は正面から、右写真は背後から）



図8 南河原の疱瘡墓（1号墓）



図9 南河原の疱瘡墓（2号墓）



図10 南河原の疱瘡墓（3号墓）



図11 南河原の疱瘡墓（4号墓）

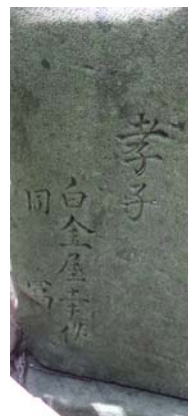
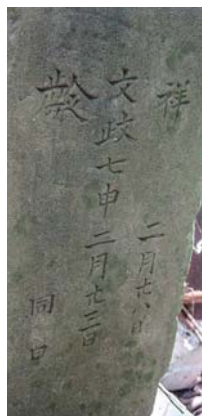


図12 疱瘡墓周辺の石の集積



図13 疱瘡墓の調査風景



図14 南河原の潜伏キリシタン墓



図15 南河原の田端墓



図16 旧木ノ口墓所のキリシタン墓

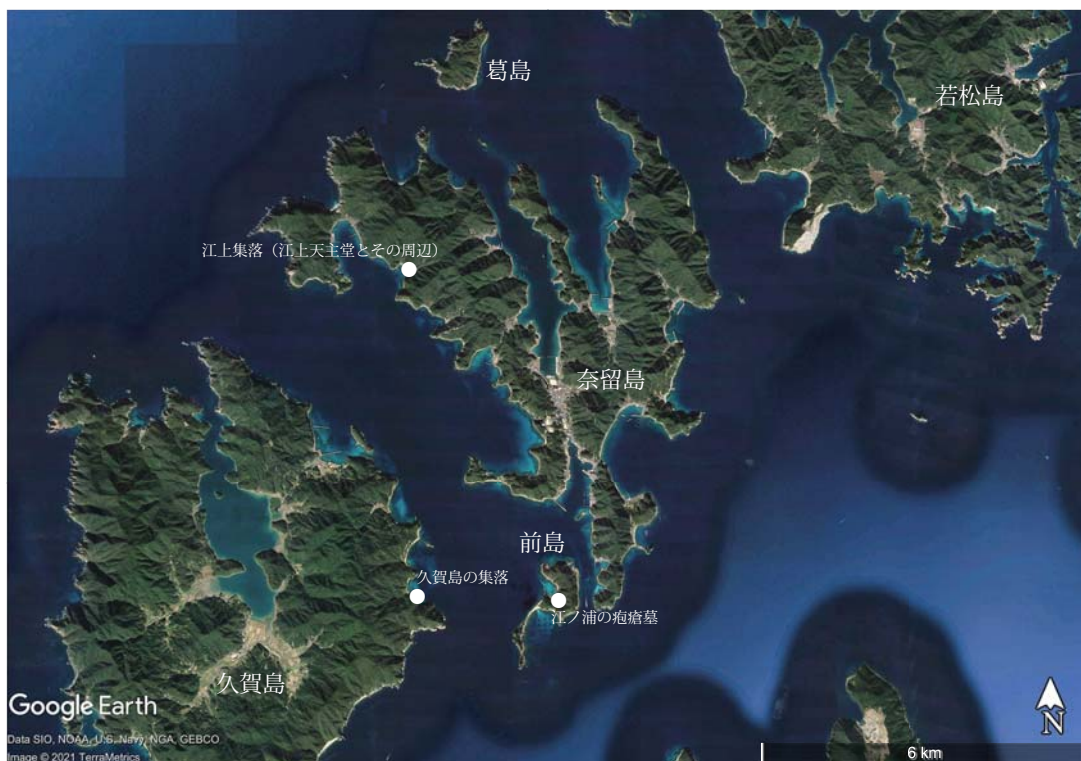


図17 五島列島中央部（奈留島周辺）衛星写真



図18 江ノ浦位置図



図19 江ノ浦の抱瘡墓位置図



図20 前島全景（西から）



図21 江ノ浦の抱瘡墓近景



図22 江ノ浦の抱瘡墓

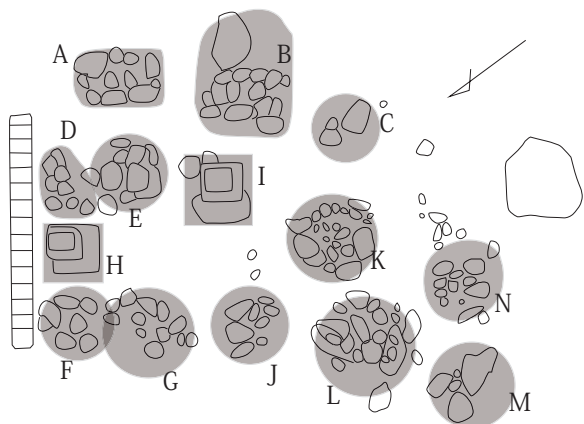


図 23 江ノ浦の疱瘡墓の配置図



図 24 江ノ浦の墓 A



図 25 江ノ浦の墓 B



図 26 江ノ浦の墓 C



図 27 江ノ浦の墓 D



図 28 江ノ浦の墓 E



図29 江ノ浦の墓F



図30 江ノ浦の墓G



図31 江ノ浦の墓H



図32 江ノ浦の墓I (山口倫十郎の墓)



図 33 江ノ浦の墓 J



図 34 江ノ浦の墓 K



図 35 江ノ浦の墓 L



図 36 江ノ浦の墓 M



図 37 江ノ浦の墓 N



図 38 江ノ浦の疱瘡墓調査風景